Śābarabhāṣya ad 1.1.1の重層性

片　岡　　啓

シャバラは，冒頭スートラ athāto dharmajijñāsā の三語，すなわち，atha/ataḥ/dharmajijñāsā を順次註釈する．その中でも，特に，atha への詳細な註釈の中で，スートラの意図を説明する．一見すると，次第に一つの結論へと向かっているように見えるが，細かく見ると，異なる主張を，順次，止揚しているのが分かる．すなわち，シャバラは，スートラ解釈にあたり，異なる幾つかの解答をシャバラ註の中で展開しており，一部は明らかに反論と明示するが，一部では自身の解答のような装いを与えながら，高次の結論へと向かう．以下が，atha にたいするシャバラ註の構成概要である．

10.3–13　世間的語法とスートラの語法は同じと見なすべきであり，その原則に則れば，直後を意味する atha の自然な意味は「ヴェーダ学習の直後に」となる．

10.14–12.3「ヴェーダ学習の，直後に，ダルマの探求」の全てに「のみ」を付すれば，一文が分裂する．

12.3–6　中間結論：「ヴェーダ学習の，直後に，ダルマの探求のみをすべきであり，沐浴ではない」というのがスートラの趣旨（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求［~~沐浴~~］）．

12.7–10　反論：「ヴェーダを学習してから，沐浴すべし」というスムリティ規定に違反するのではないか（ヴェーダ学習→［直後］→沐浴）．

12.11–16　回答1：直後に沐浴すれば，ヴェーダ学習の目的が見られず，ヴェーダが無駄となってしまうので，スムリティ規定を無視してもよい（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求［~~沐浴~~］）．

12.16–18　回答2：「ヴェーダを学習してから」は《直後性》ではなく「後で」を直接表示するので，沐浴（帰宅）は，ダルマ探求の後でよい（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求→ダルマ理解→沐浴）．

12.18–20　回答3：直後性を直接表示するとしても，結果的には間接表示によ

り「後で」を意味するので問題はない（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求→ダルマ理解→沐浴）.

12.20–14.2　回答4：「沐浴すべし」自体，未見目的につながる沐浴規定ではなく，沐浴制限の終了を述べる既見目的を持つものである．スートラの意図は，未見目的を持つことの排除にある（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求→ダルマ理解→沐浴制限終了［~~沐浴→未見目的~~］）.

14.3–7　総括：直後性を意味する atha から「ヴェーダ学習の直後にダルマの探求をすべきであって沐浴すべきではない」という意味が理解される（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求［~~沐浴~~］）.

以下では，atha をめぐって展開されるスートラ解釈について，特に，中間結論と最終結論（回答4）の対比に注意しながら，その背景を探る.

バヴァダーサ解釈の復元

クマーリラ復註から知られるように，シャバラが冒頭で批判する論敵は，五世紀前半頃に位置し，シャバラ当時もミーマーンサカの代表として有名であったと思われるバヴァダーサである．バヴァダーサの解釈は，athātaḥ を，あたかも一語のように扱い，全体でもって，直後性（ānantarya）を直接表示すると考える．「術語として導いてもならない」（10.4–5: na...paribhāṣitavyo vā）とシャバラが指摘するように，athātaḥ を一種の術語（paribhāṣā）と捉え，世間の用法とは異なるものとする．実際のところ，これは，スートラ文献における athātaḥ の用例に適っており，自然な解釈である．スチャリタは，バヴァダーサの詩節を引用している.

Kāśikā ad *Ślokavārttika* pratijñā, v. 34（14.10–11）:
bhavadāsena coktam—
athāta ity ayaṃ śabda ānantarye prayujyate/

バヴァダーサの見解について与えられている情報は，これだけである．しかし，この《直後性》の解釈から，ある程度，バヴァダーサ解釈の全体を予測することは可能である．おそらく，シャバラ註に見られるのと同様，バヴァダーサは，athātaḥ の意味するところを，「ヴェーダ学習の直後に，ダルマを探求すべし」と考えていたとするのが自然である．これ以外の解釈であれば，シャバラが更に批判を加えていたと考えられる．おそらく，シャバラは，athātaḥ を，ひとまとまりの術語のように扱うバヴァダーサの手法を批判しながらも，結論にあたる《直後性》の解釈は，そのまま継承していると思われる.

また，シャバラは，中間部分で，以下の見解を，あたかも自身の結論であるかのように表明する．

前主張：ヴェーダ学習→（直後）→沐浴（帰宅）→未見目的
定説：ヴェーダ学習→（直後）→ダルマ探求→ダルマ理解（既見目的）

すなわち，「ヴェーダ学習の直後にすべきはダルマ探求であって，沐浴ではない．沐浴の場合には既見目的が見られず未見目的を想定しなければならないが，ダルマ探求の場合には，ダルマ理解という既見目的が見られるので」という atha の含意を，スートラ全体の意味として提示する．この見解は，atha の意味を直後性とする見解から，直接に，また，自然に導かれるものである．シャバラが，この見解を，後に更に乗り越えようとすることを考慮すると，やはり先行するバヴァダーサの結論であった可能性が考えられる．

これがバヴァダーサの結論であったことを認めるならば，シャバラのバヴァダーサに対する批判方法の一つも十分理解できる．すなわち，スートラの語義を解釈するに当たって，世間的用法から乖離する場合には，無理な想定を行わざるをえない．したがって「これら（スートラ）の意味を，補足等によって想定してはならないし，術語として導いてもならない」とシャバラは言う．これは，「想定」(pari-kḷp）という語から分かるように，「既見対象を捨てて，未見対象を想定してはならない」という原則を念頭に置いたものである．そして，同じ原則は，atha をめぐって展開されるスートラ全体の解釈にも見られた．おそらく，シャバラは，既見・未見の対立をもってスートラ解釈を行ったバヴァダーサ自身のスートラ解釈手法と同じ視点から，バヴァダーサにたいして，「あなた自身の論法に従えば，athātaḥ を術語と解釈すべきではない」と批判したと理解できる．

また，この中間結論に至る過程で，シャバラは，一文性の問題も指摘する．すなわち，atha の第一義的意味である《直後性》にしたがって「ヴェーダ学習の（vedādhyayanāt）直後に（anantaram），ダルマの探求（dharmajijñāsā）」というスートラ解釈を行う場合，どこに「のみ」（eva）という不変化辞を挿入し，一文の力点を置くかという問題である．中間結論から明らかなように，最終的には，「ダルマの探求のみ」とされ，その含意として，沐浴の排除が意図されていると考える．同時に，それ以外の可能性として，全てに「のみ」を置く場合が考慮されている．すなわち，「ヴェーダ学習のみの直後のみにダルマの探求のみ」という解釈である．当然，ミーマーンサカなら誰でも気が付くように，これは，一文を分裂させ

てしまう．「ヴェーダ学習のみの後であってそれ以外の行為の後ではなく，直後のみであって前でなく，ダルマの探求のみであって沐浴（帰宅）ではない」となってしまい，一文の焦点が定まらなくなってしまうからである．

中間結論以前にこの問題を展開するシャバラの態度から推測すると，この一文性の問題も，バヴァダーサが既に展開していたと考えるのが自然である．つまるところ，シャバラは，中間結論においては，athātaḥ を術語とするバヴァダーサの論法自体は批判しながらも，結論は，ほぼそのまま継承していると推測できるのである．

以上の中間結論で，一通りのスートラ解釈は事実上，完結している．シャバラは，「そうではなく，ヴェーダを学習し終わると，二つのことが降りかかってくる．師の家から帰らねばならず，また，ヴェーダ文を検討しなければならない．両選択肢のうち，『師の家から帰ってはならない．どうやって，ヴェーダ文を検討するというのか』を意味するのが，この［スートラの］教示である」と締めくくる．表現・内容から考えて，atha にたいする註釈の結論部分とするのが自然である．実際，この一文は，シャバラがバヴァダーサからコピーしたのではないかと思わせるものがある．「そうではなく」という逆接も，若干不自然であり，原文では自然であったものが，シャバラが補足説明を挿入するうちに，前との対比関係が薄れたのではないかとの疑念を抱かせる．また，シャバラは後に，自身の最終結論を表明する中で，この中間結論がスートラの趣旨として提示する「師の家から帰ってはならない」（gurukulān mā samāvartiṣṭa）という表現を，あたかも，スートラ自身の表現であるかのように繰り返している．シャバラにとり，定型句として意識されていたことからも，先行する註釈の表現と推測される．

シャバラ自身の見解

シャバラ自身の最終的結論（回答4）は，この中間結論を更に乗り越えようとする．すなわち，「また，この沐浴は，未見目的を持つものとして規定されているのではない．そうではなく，間接表示により，沐浴してはならない等という制限の継続終了を，ヴェーダ学習と同期間のものと述べるのが『ヴェーダを学習してから沐浴すべし』である．『師の家から帰ってはならない』というのは，未見対象を目的とすることを排除するためだけにある」とシャバラが総括するように，「ダルマの探求」に「のみ」を置くのではなく，「既見対象を目的とすること」に「のみ」を置き，「未見対象を目的とすること」を排除するのが，一文の主眼とされ

る．「ヴェーダ学習の，直後に，ダルマを探求すべし．既見目的を持つことだけのために．未見目的を持たないように」というのが，「のみ」が置かれるべき主眼点となる．

また，ここでは，沐浴を規定するスムリティ規定「ヴェーダを学習してから沐浴すべし」についても，更なる解釈が示されている．すなわち，中間結論においては，単純に，このスムリティを沐浴（帰宅）規定と前提していた．

前主張：ヴェーダ学習→（直後）→沐浴（帰宅）→未見目的
中間結論：ヴェーダ学習→（直後）→ダルマ探求→ダルマ理解（既見目的）

これにたいし，シャバラは，これが沐浴規定であること自体を否定し，ヴェーダ学習期間中，学生が，定められた以外の沐浴をしてはならないこと等の制限を解除するものと見なす．すなわち，「沐浴すべし」を間接表示により，「沐浴してはならない，ということはない」と解釈するわけである．その理由として，中間結論と同じ論法である未見・既見の対立を用いる．

前主張：ヴェーダ学習→ダルマ探求→ダルマ理解→沐浴（帰宅）→未見目的
最終結論：ヴェーダ学習→ダルマ探求→ダルマ理解→沐浴制限終了（既見）

「ダルマ探求のみ」から「既見目的を持つことのみ」へと力点が移動した背景は，スムリティ規定の会通のためである．実際，シャバラは，スムリティ規定の解釈について，合計四つの解釈を示している．第一番目は，単純に沐浴規定と解釈するものである．中間結論が前提としているものと同じであり，おそらく，バヴァダーサの見解に則ったものと思われる．「スムリティ規定よりも，ヴェーダの既見目的であるダルマ理解を優先させて，ダルマ探求をすべし」というのが趣旨である．しかし，「ヴェーダを学習してから」の「～から」の意味を，「の直後に」ではなく「後に」とするならば，スムリティ規定の違反を回避できる．すなわち，ダルマ探求をし，ダルマを理解した後で，沐浴・帰宅すればいいわけである．ここでシャバラは，「～から」を示す Ktvā の解釈について，「後に」を直接表示するとする見解（回答2）と，「直後に」を直接表示するとする見解（回答3）とを記す．バヴァダーサとシャバラの間に，すでに，スムリティの語句をめぐる幾つかの見解があったことが予想される．一つの可能性としては，シャバラに先行する Vṛttikāra が考えられる．シャバラ自身は，さらに，その上を行こうとして，沐浴規定であること自体を否定する．ただし，その理由は，同じく既見・未見の対立であり，

バヴァダーサ以来の論法の拡大適用と見なせる．

興味深いことに，atha の意味を再度まとめ直す総括部分では，自身の見解も含みうるが，どちらかといえば中間結論をそのまま繰り返した記述をシャバラは行っている．すなわち，「一文が分裂しないよう，『ダルマ探求のみであって沐浴ではない』と解釈すべきである」という主張である．自身の新たな見解を全面的に押し出すよりも，皆が合意する無難な結論を総括として提示したと考えられる．

結論

事実として，シャバラ註における atha をめぐって展開されるスートラの趣旨解説には，中間結論と最終結論の二つがある．以下がその主張である．

1. 一文性と既見・未見の対立を考慮して「ヴェーダ学習の直後にダルマ探求のみをすべきであって，沐浴ではない」（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求［~~沐浴帰宅~~］→ダルマ理解）と解釈できる．
2. 一文性と既見・未見の対立を考慮すると同時に，スムリティの会通も視野に入れるならば，「ヴェーダ学習の直後にダルマ探求をすべきである．既見目的のみを持つように，未見目的を持たないように」（ヴェーダ学習→［直後］→ダルマ探求［~~沐浴帰宅~~］→ダルマ理解［~~→沐浴→未見目的~~］）と解釈できる．

「スートラの語法は世間的語法から乖離して解釈すべきではない」とシャバラが冒頭で批判する論敵は，クマーリラによれば，バヴァダーサである．彼は，athātaḥ は，全体で一種の術語として直後性を意味すると解釈していたようである．すなわち，証言事実として，バヴァダーサは，《直後性》をスートラ解釈の起点としていた．この事実からバヴァダーサ自身のスートラ解釈の全体像を推測すると，シャバラの中間結論は，バヴァダーサ自身の論法・結論を反映あるいは採用したものと考えるのが自然である．シャバラ自身は，バヴァダーサを更に乗り越えようと，バヴァダーサの論法を拡大適用すると同時に，先行したと思われるスムリティ解釈を念頭に置きながら，自身の新たな最終結論を打ち出した．しかし，総括部分では，自身の斬新な解釈を前面に押し出すことは控え，既に権威の確定していたバヴァダーサの無難な結論を繰り返していると思われる．

〈参考文献〉

Frauwallner, Erich, ed. 1968. *Materialien zur ältesten Erkenntnislehre der Karmamīmāṃsā*. Wien:

Hermann Bölaus Nachf.　**Śāstrī, K. Sāmbaśiva, ed. 1990.** *Mīmāṃsāślokavārttikaṃ Sucaritamiśrapraṇītayā Kāśikākhyayā Ṭīkayā sametam*. Part I. Trivandrum: CBH Publications.

（本稿執筆にあたり科研費20K00056の助成を受けた）

〈キーワード〉 Śabara, Bhavadāsa, dharmajijñāsā

（九州大学大学院准教授，博士（文学））

新刊紹介

松本 峰哲　著

構築された仏教思想　ツォンカパ
――悟りへの道―三乗から真の一乗へ――

B6判，236頁，本体価格1,700円
佼成出版社，2021年3月